

2013年8月

正法眼蔵

有時に参ずる

その一

金子勝俊

目次

|  |    |
|--|----|
| 第一章 正法眼藏有時第二十                          | 4  |
| 1 有時の趣意                                | 4  |
| 2 有時の現代語風                              | 4  |
| 3 正法眼藏有時第二十 原文 試訳 注釈                   | 13 |
| ▼古仏言 『有時(存在と時間)のうちに全てが現成している』          | 13 |
| ▼われを排列しをきて 『反省の中に自己の存在と時間を確認する』        | 15 |
| ▼恁麼の道理なるゆへに 『現前する世界は一であり多であつて時間と共に有る』  | 19 |
| ▼しかあるを、佛法をならはざる 『凡人は時間の経過を考える』         | 21 |
| ▼しかあれども、道理この一條 『時は経過しない、現在があるのみ』       | 22 |
| ▼三頭八臂はきのふの時なり 『昨日今日は今において同時、時は飛び去らない』  | 25 |
| ▼要をとりていはば 『過去現在未来を今の世界として把握すること、それが経歴』 | 28 |
| ▼いま世界に排列せるむま 『有時を究めることは自己の真理を悟ること』     | 31 |
| ▼おほよそ、籬籠とどまらず 『経歴は世界の今を生きること』          | 34 |
| ▼薬山弘道大師 『揚眉瞬目も山海も有時の現成である』             | 37 |
| ▼葉県の帰省禅師は 『真理の現成と行為の中に有時をみる』           | 42 |

▼向来の尊宿ともに 『道半ばでも道を誤っても有時』……………48

第二章 道元禅師の時間概念……………

1 現成公案……………

2 刹那の分析 (非連続の刹那が連続しているものとみなす意識のあり方)……………

3 刹那の現在化(構築)……………

4 刹那の時間の経過について……………

5 宗教における時間概念と哲学における時間概念(身心脱落における時間意識)……………

参照…道元の時間概念を参究するために参照した哲学における時間概念……………

1 フッサールの時間意識…第一次記憶と第二次記憶(予期と把持)……………

2 ハイデッガーの予期と把持の脱自的統一……………

3 サルトルの時間……………

4 西田幾多郎の非連続の連続について……………

5 田邊元 正法眼蔵の哲学私観 について……………

6 秋山範二 道元の研究について……………

参考文献……………

## 第一章 正法眼蔵有時第二十

### 1 有時の趣意

森羅万象は有であり時である。自己の中に有時を觀る。目の前の世界は時と共に有る。時は過ぎ去ることがない、現在があるだけである。過去と未来は現在の一つ様相である。今生きているこの世界が過去も未来も包含して満ち溢れること、それが經歷。それは世界の今を生きたことであり、自己の眞實を悟ることである。顔の表情も大自然も世界の運動であり、有時の現成である。眞理の現成とそこに至る行為の中に有時を見る。道半ばで右往左往することが有時。

### 2 有時の現代語風

昔の偉いお坊様が言われるのに

「有る時、高い峰の頂きに立つ

有る時、深い海底を進む

有る時、頭が三つ、手が八本ある妖怪がそこにいる

有る時、仏様が立ったり坐ったりしている

有る時、お坊様がハエや蚊を追っ払っている

有る時、燈籠がそこに立っている

有る時、太郎さんと次郎さんがそこにいる

有る時、大地と空が拡がっている」

「有る時」すなわち有<sup>う</sup>時とは時間が存在であり、存在が時間であることである。黄金の仏は時と共に有るが故に、明るく輝いている。今我々の一日二十四時間をよく考えてみよう。頭三つ、手八本の妖怪も時と共にそこにある、時と共にということは二十四時間そのものということである。一日の二十四時間が長いか短いか、速いか遅いか、考えても考えなくても一日は二十四時間である。過去から未来に向って時が流れていることは誰でも分っているから、あまり疑ってもみないが、だからといって誰が時を知っているのだろうか。日々の出来事に疑問を抱くことはよくあるが、疑いは時とともに移ろいゆくもので、昔抱いていた疑問と今の疑問は同じではない、それは疑問が時のハタラキだからである。

自分を世界の中に置いて、その世界のあらゆるものが常に時と共にあるということを体験してみよう。物と物は確かに妨げ合わずに併存していることが見て取れる、同じように時もあらゆる時が妨げ合わずに併存しているのである。だからお釈迦様が真実を求めようとしたその時に、実は私も真実を求めようとしていたのであり、同じ真実が時を隔てて成就しているのである。それは修行においても同様である。自分を世界の中に置いて、自分がその世界を見ている。それが時と共にあると云うことである。

今、森羅万象が目の前にある、その現れが「有る時」、すなわち有<sup>う</sup>時でありそれを理解することが修行で

ある。大地に生える一本の草は草原そのものであり、草原が一本の草であることを体得する、それが有時であり、一時いちじが万時まんじである。森羅万象は時ときであり、時は森羅万象である。果たして時に関わりのない世界があるのだろうか。

ところが、仏の説く真理を理解しない凡人は、「有る時」と云えば、あの時は妖怪がいた、この時は仏様がいたなどと思ってしまう。例えば、河を渡り山を越えて今ここにいるとする。今でも当然その山河はあらずである。そして玉飾りのついた宮殿の朱色の楼閣に佇んでいる今思うことは、山河があつて私がいる、天も地もあるということである。

しかし時についての考え方はこれ一つではない、いわゆる山を上り、河を渡った時に私がそこにいたのであつて、私がいたことが時そのものなのである。時が過ぎ去っていくのではない。もし時には現在のみがあつて過去及び未来がないとすれば、上山した時はまさに「この今」になろう、時に過去及び未来があるとするなら、それはこの私がこの今をもちあつていようことなのだ。これが有時というものである。かの山を上り、河を渡った「その時」はこの宮殿や楼閣にいる「この時」を呑み尽くして一つの時にしてしまふであらうか、あるいは吐きだしてそれぞれ「別の時」を産み出すのであらうか。

昨日妖怪がいた、今日は立っている仏が、あるいは坐っている仏がいる、しかしその昨日今日という時間概念はただ山に分け入って連なる峰々を一度にかつ同時に見渡す時の光景そのものである。過ぎ去っていく光景というものは無い、昨日の妖怪も私の時として同時なのである、昨日という遠い向うに過ぎ去つてしま

ったことのようにあるが、この今において同時なのである。立位、坐位の仏像に礼拝する時も私の時として同時である、たった今過ぎてしまったばかりのようであるが、この今なのである、だから峰々に繁る松も同時であり、竹も同時である、時は飛び去るとのみ考えてはいけない、時が飛び去ることは時のハタラクであるとはばかり考えてはならない。時がもし飛び去るとすれば、そこに隙間が生ずるはずではないか、時のハタラクを本当に理解しないのは時というものがただ過ぎ去っていくとばかり思い込んでしまったからである。

要するに、この世界は連続する時なのである。有時とは私の存在であり時間である。有時の現われの一つとして経歴(時間空間の転位)というハタラクがある。今日より明日へ経歴する、今日より昨日に経歴する、昨日より今日へ経歴する、今日より今日に経歴する、明日より明日に経歴する。経歴は時のハタラクだからである。

過去と現在とは重なっているのではないし並び連つてもいないが、昔の偉いお坊様がいた時は実は私がいた時でもある。修証の一つひとつが時そのものなのである。泥にまみれ水につかつて我々を救済する時も同じ時である。凡人は凡人の見方しかできないが、それは真実ではない、真実が凡人を抛り所として現われているだけなのである。自分の世界を真実ではないと勝手に思い込んで悟りの世界を自分とは違う次元のものだと誤った認識をもってしまう。仏様ほど偉くはないと言って卑下するのもまた有時の一つひとつではあるが、悟らざるものはよく真実を見究めなさいという訓えを心に刻みこもう。

今日普通に使われている正午とか午後二時という時刻は、世界の時の流れの一時点であり、時の現れの一つひとつである。午前零時という時刻も時、午前四時も時、我々も時、諸仏も時である。頭三つ、手八本の

妖怪がいて、立ったり坐つたりの仏陀がいるこの世界があるのは時があるからである。この世界をそのままに見究めることがこの世界を理解することに繋がるのである。仏陀とともに仏になりきって、仏道に帰依して仏と共に有ること、それが即ち存在であり時間であり有時である。時を究め有を究めて、究め尽くすのである。究め尽くしているから余りがない、余計なものがないから。有時を半分究めたとすれば、それは半分の有時を究め尽くしたのである。それが間違つていようと、それも眞実の現われである。さらに有時の眞理に身を委ねれば、間違えが起こる前も後も、有時の眞理の實現であり、眞理の活き活きとしたハタラクナのである。これが有時である。そんなハタラクナなど無いと考えてはいけない、また常に有るものだと豪語してもいけない。時間はただ過ぎていくものだと考えて、「未だ到らず」ということを理解しない人もいる、理解と云う行為も時のハタラクナではあるが、どのように理解しても時の眞実が歪められることはない。過去から未来に流れるという先入觀念に捉われてしまつて、現在のありのままの世界を理解しようとする者がいない。そのような者に解脱の時などあり得ようか。昔から眞実の世界を認めてきた者であっても初めから具わっているかくある自身の悟りを誰が理解していようか。たとい以前からかくあるものであると言つてきている者も、目の前に見えるものを未だに探そうとしている。凡人の考える有時においては、眞実の世界も時はただ過去から未来へ流れ去るものとしか見えないのだろう。

およそ眞実世界の有時は限定できるものではない。今自分が想う天上世界も、この世の生物世界も、昼夜明暗に時を過ごす万物の世界も自己の眞実世界の有時のハタラクナである。自己のハタラクナが時間空間の転位なのである。



経歴きんりきというのは風雨が西から東に移るように単に時間が経過するということではない。世界は動かないわけでもないし、変らないわけでもない。それは時に生きているのである。経歴きんりきとは例えば春のようなものだ。春にはたくさんの様相がある、春の経歴きんりきとは、春を實踐・体験することである。経歴きんりきは春ではない、しかし時は春を現わしているが故に、春と云う時が実現しているのだ。よくよく時の流れと云うもの熟慮すべきである。悟りという目標を外においてその悟りに向かって空間的時間的に到達しようと思うことだけが仏道の参学ではない。

薬山やくざん大師はあるとき彼の師である石頭せきとう大師の指示によって馬祖道一ばそどういつせんじ禪師の処ところに赴き教えを乞うた。「私は仏教のあらゆる教えを習いましたが、達磨だるま大師が中国にやってきたことにどのような意味があるか分かりません。」この問に対して、道一は答えた。

「有る時、釈尊がにっこり微笑んで弟子である摩訶迦葉まかかじょうに法を継いだ。

有る時、釈尊は微笑まないので法は継がれない。

有る時、釈尊がにっこり微笑んで摩訶迦葉に法を継いだことが達磨の仏法伝来である。

有る時、釈尊がにっこり微笑んで法を継いだことは仏法伝来と関係ない。」

薬山はこれを聞いて大いに悟り、道一に云った。「私はかつて石頭の下にありましたが、蚊が鉄の牛に登っていたようなもので全く理解できませんでした。」

道一の云う所はほかの人と同じではない、にっこり微笑むのは山と海であり、山と海がにっこり微笑むのである。釈尊がにっこりするということは顔の動きであり山を動かすという運動の実現である、又釈尊が

微笑むということは表情の変化であり海に河の水が流れ込むという躍動の体験なのである。達磨大師だるまの仏法伝来は釈尊から摩訶迦葉へと法が継がれたことと同じ有時である。しかし仏法伝来の否定が必ずしも釈尊から迦葉への相承を否定するものでもない。いずれにしてもこれらはもともと有時(存在と時間)の体験なのである。

山も時、海も時。時がなければ山と海はない。目の前の山と海が動かないからと思つて時も動かないと考へてはならない。時が壊れれば、山と海も壊れる。時がもし壊れなければ、山と海も壊れない。釈尊が明けの明星に於いて悟つたものはまさにこの道理であり、釈迦が摩訶迦葉まかじやうへと法を継ぎ達磨を経て今に至る仏法が伝わっているのである。これこそ真実の時の現われであり、自己の真実に時がなければこのようなものではなかつたのである。

葉原せのけんの帰省きせい禪師ぜんじは臨濟義玄りんさいぎげん(八六七臨濟宗の宗祖)の流れを汲むものであり、首山省念しゆざんしやうねん(九二六〜九九三)の弟子である。あるとき彼が大衆に向かつて次のように説いた、

「有ある時、言葉が届とかずとも思いが届く

有る時、言葉は届くが思いが届かない

有る時、言葉が届いてしかも思いが届く

有る時、言葉も届かず思いも届かない。」

「思い」「言葉」共に有時であり、「届く」「届かない」も共に有時である。未来は未だ到来していないが、「今」の中に未来はある。思いも言葉も同類である。「届く」とは時到るということではない。「届かない」

とは時知らずということでもない、有時とはこのようなものである。「届く」は届くということにのみ関わりをもっていて、「届かない」ということには関わらない。「届かない」は届かないことにのみ関わりがなくて、届くことに関わらない。思いは思いに捉われ、思いを見る、言葉は言葉に捉われ、言葉を見る。邪魔に邪魔されて、邪魔とは何かと考える邪魔がいる、これが時である。向こうに真理というものがあるように見えるから邪魔してやろうという気になるのであるが、いくら邪魔しようとしても真理が邪魔された試しはない。有時の中で私が他人の真実に逢う、それはその人の真実が別の人の真実に逢うことであり、私が自身の真実に逢うことでもあり、私の悟りが悟り自身に逢うことなのである。もしこれらが時を伴っていないとしたら、このよ、う、な、も、の、に、は、な、ら、な、か、つ、た、で、あ、ろ、う。「思い」は真実実現（現成公案）の状態である、「言葉」は成道の行為である。「届く」は身心脱落の状態である、「届かず」は離れず一体の行為である、このように理解すべきである、真実の存在と時間を味わうのだ。

今まで見て来た昔の偉いお坊様がその様に云っていると、ほかに云うことがないだろうか、例えばこのように云ったらどうだろう、

「思いと言葉が届いているに達しないうじ有時がある、  
思いと言葉が届いていないに達しない有時がある、  
次のような修行の究めがあってもよいだろう。」

「釈尊がにっこり微笑んで弟子である摩訶迦葉まかしやうに法を継いだに達しない有時がある。

釈尊がにっこり微笑んで弟子である摩訶迦葉に法を継いだのは勘違いであるとすると有時もある。

釈尊が微笑まない有時は何かの勘違いであつて、その勘違いのうちに眞実を見るのも有時である。」

このように未来に赴き、過去に赴き、(思いが)届くということを楽しむ届かないことを味わう、これら全て有時の時なのである。

### 正法眼藏有時第二十

一二四〇年十月のある日、興聖こうしょうほうりんじ宝林寺において書する。

一二四三年梅雨籠りの時に書写する、懷妊えしやう。

▼古仏言

『有時(存在と時間)のうちに全てが現成している』

【原文】

古仏一言、  
 有時高々峯頂立、  
 有時深々海底行。  
 有時三頭八臂、  
 有時丈六八尺。  
 有時拄杖松子、  
 有時露柱燈籠。  
 有時張三李四、  
 有時大地虛空。

いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。丈六金身これ時なり、時なるがゆへに、時の莊嚴光明あり。いまの十二時に習学すべし。三頭八臂これ時なり、時なるがゆへに、いまの十二時に、一如

一 葉山惟儼和尚 「須向高々山頂立、深々海底行」景德伝統録二八

なるべし、十二時の長遠短促、いまだ度量せずといふども、これを十二時といふ。去來の方跡あきらかなるによりて、人これを疑著せず、疑著せざれども、しれるにあらず。衆生もとよりしらざる毎物毎事を疑著すること一定せざるがゆへに、疑著する前程、かならずしもいまの疑著に符合することなし。たゞ疑著しばらく時なるのみなり。二

《注釈》

存在に対する時間の提起、誰も疑わない時の流れを改めて問う。時間があることによつて全てが現成していることを示す。行為あるいは運動が時と変化において実現していると云うことをこの巻のテーマとして提示している。しかし時の変化とは誰しもが考えている時の流れとは異質のものであることを主張している。

【参考資料】

【正法眼蔵御書抄、詮慧】有時と云うは即これと云う程の心なり、あるときの詞すなわちこれなり、即是高々峯頂立、深々海底行とも云ふべし。有與時兩字とは心得まじ、有とは時也。

【正法眼蔵聞解、一面山瑞方】三世の諸仏有を知らず、狸奴白牯却つて有を知る、と云う、この有なり。一切の根本を指して有と云う。

二 原文は岩波書店刊日本思想体系道元による。同書は洞雲寺本を底本としている。

【正法眼蔵御抄、経豪】普通に心得たる有時の詞には乖角(対立・矛盾)也、これは尽十方界を以て有と仕、時也以尽十方界時と取也、故有與時非可格別、只同物なり。

【正法眼蔵啓迪、西有穆山】高々峰頂立も有時なり、心の有時でないものはない。事事物物は思量の上  
に一定の根拠があるのではない、妄想の計度だから、その疑著する考えの道理が必ずしも法の真理と符合する  
のではない。

【正法眼蔵中山釈、中山延二】衆生はもともと時間とか、更に有時というようなものについてはもとより  
何も知らない・・・そういう衆生がかりに毎物毎時について疑著したとしても、その解明などはとうていで  
きるものではない。有時としての決定など出来るものではない。そういう疑著そのこともすでに時である。  
【正法眼蔵の哲学、田中晃】かく疑うこと自体がすでに時なのであり、時はこのように吾々の行為と相即  
していることを知らねばならぬ。

【道元の実践哲学構造、高橋賢陳】「あるとき」といわれる言葉自体の中に存在を離れて時間はあり得ない  
意味が秘められているとの理論根拠から全一卷が述べられている。

## 【原文】

▼われを排列しをきて

『反省の中に自己の存在と時間を確認する』

われを排列しおきて盡界とせり、この盡界の頭々物々を時々なりと覩見すべし。物々の相礙せざるは、時々

の相礙せざるがごとし。このゆへに同時発心あり、同心発時なり。および修行成道もかくのごとし。われを排列して、われこれを見るなり。自己の時なる道理、それかくのごとし。

【試訳】

自己を世界の中の一員として置く、それが世界であつて、その世界のあらゆるものが時間そのものであることを実感(体験)すべきである。物と物が互いに妨げ合わずに世界が構成されているのは時と時が妨げ合わずに時間が成り立っているのと同じである。だから釈迦牟尼仏が菩提心を起したときに、実は私も菩提心を起していたのであり、同じ菩提心が時を超えて現成していたのである。それは修行成道においても同じことであつて私の修行は釈迦牟尼仏の修行そのものである。自己を世界の中の一員として、自己がその時の世界を見る。自己が時と共にあると云うことは自己が世界の一員であることを確認することである。

《注釈》 同心発時について

「釈迦牟尼仏言『明星出現時、我与大地有情、同時成道』。同時の発心、修行、菩提、涅槃なるべし」  
三。「仏祖の大道、かならず無上の行持あり。道環して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隔あらず、行持道環なり。」<sup>四</sup>

三 正法眼蔵 發菩提心の卷 第六三 岩波文庫 正法眼蔵(三) 三三二頁  
四 正法眼蔵 行持の卷 上 第一六 岩波文庫(一) 二九七頁



道元禪師の時間觀念においては発心・修行・菩提・涅槃が時間の流れと共に階段を上っていくのではなく、わずかの隙間もなく同時に行われると云うこと、釈尊が成道するとき山川草木悉皆成仏なのである。同時発心、同心発時を解釈本では、「心仏というもみな有時の現成で、一切礙えぬ」（啓迪）、「発心と時とは別物ではない、だからまた同心発時ともなる、発時と心とは別物ではない」（伊福部）、「時も我々の心も、更に菩提心もすべてこの世界の一切は真如（一心）の活波乱である」（中山）、すなわち一如としている。同時発心は大地有情同時成道そのものであり、釈迦牟尼仏が成道した時、尽十方界悉皆成仏なのである。それは二千五百年前（歴史上の釈迦牟尼の歴史の一時点）において釈迦牟尼が成道した時に大地有情が成道したとする。それは同時成道であり、同時発心である。しかしそれに続く「同心発時」は同時発心の文字を入れ替えただけであろうか、禪師がここで単に言葉の綾取りをしているとは考えられない。それではその文字の入れ替えにどのような意味を持たせたかったのであろうか。同時と同心、発心と発時、ここに有時の基本的な考え方、すなわち世界と時間を別の軸で捉えようとする概念が隠されていると考えるのである。同心とは世界を一つとし、発時とは未来永劫、成道するのである。同心発時とは菩提心が時間を成立させ、世界を有時として現成させる、同じ菩提心を世界が共有し過去現在未来に亘って成道し続ける事を意味していると考えられる。成道するあらゆる菩提心が現在に集約されることになる過去現在未来において発していることを示している。成仏とは自己が自己を成り立たせることをいう。自己が時間を超越して自己の真実に生きることをいうのであろう。

【参考資料】

【御抄】此の我は仏法の我也・・・排列とは・・・唯我が盡界じんがいなる所を、排列とは云なり。成道という道理だにも、いでくれば、大地有情同時成道の理を離れて、成道と云ふ事不可有。盡界が盡界を見る程の道理なるべし、時が時を見る心地也。

【御聴書】同時發心と云えば、・・・心と時と一をきて云べきにあらざるゆへに、同時發盡界なるべし。我と称す峯、我と称する海也、吾我の我にてはなし。

【聞解】排は、をしひらき、なみよくならぶ、・・・盡界がみなわれで、我の外に盡十方界は無い、迷悟凡聖共に有時ですきまなし。手前の自己を排しておいて、われがわれを見る。

【啓迪】「ただ疑著」というのを受けて、その疑著するわれ一つを出して疑界にならねば、それで尽界量が尽きる。

【中山】我と尽界とは・・・否定的媒介的に矛盾的相即的不二一体でなければならぬ。時間的今は無限の過去、無限の未来を含んでいる。空間的此所は無限の空間を含んでいる。

【正法眼蔵新講 伊福部隆彦】發心、修行、成仏というように、如何にもそこに時間経過があるように思うが、・・・發心のわれ、修行のわれ、成仏のわれをならべておいて、われがわれを見ているだけである。われなるものが時そのものである。

【田中】初めのわれは万有をあらしめる存在の根拠であり、後のわれはその所以を見る自覚の根拠である。有時の特色は法位が時をなすことである。法位はすなわち生成生滅の場なるが故に時なのである。

▼恸麼の道理なるゆへに 『現前する世界は一であり多であつて時間と共に有る』

【原文】

恸麼の道理なるゆへに、尽地に万象百草あり、一草一象おのの尽地にあることを参学すべし。かくのとくの往来は、修行の発足なり。到恸麼の田地のとき、すなはち一草一象なり、会象不会象なり、会草不会草なり。正当恸麼時のみなるがゆへに、有時みな尽時なり、有草有象ともに時なり。時々時に尽有尽界あるなり。しばらくいまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし。

【試訳】

そのような世界のあり方であるが故に、自己が世界の中で全ての形あるものと、全ての草木と共存しており、一本の草、一つの形あるものと共に世界が現成している事を学ぶべきである。このように一つが全てであり、全てが一つであることの体験は修行そのものである。そのような世界に至れば、一本の草は草であり一つの形あるものは形あるものであり、形あるものを理解することもあり理解できないこともある、草を把握できることもあればできないこともある。全てがそのような時だから、時間空間は時を尽くし、森羅万象は時そのものである。時がまさに世界を構成しているのである。あらためてこういった時をよく考え、そして時を離れた世界があるかどうか、よく確認してみるとよい。

【参考資料】

【聞解】 天に掛る日月も地にあらはるる山河も、皆自己を排列したのじや。

【正法眼蔵私記】 蔵海【恁麼の道理なるがゆゑにとは、自己の時なる道理でうけたり。かくのごとくの往来とは、百草萬象の盡地にある、みな時にあゆみをはこぶをもて往来といふ。

【御抄】 有時高々峰頂立、深深海底行、乃至大地虚空なむと云所を、しばらく往来と可談歟、恁麼の田地とは、田地をば所と云心地也：有時皆盡時とは：有時独立のすがたを云なり。

【御聴書】 この盡地は自にあたる、自己の上に萬象をあらはすに似たり、但盡界がやがて、萬象なれば、まだ一草一象も盡地也、是什麼物恁麼來の盡地なり、盡地を以て自己とするゆへに、有時高々とも、有時深々とも云也。

【正法眼蔵那一宝】 老卵父幼【物々時々の相碍せざるを且く往来という。

【啓迪】 かくのごとくの往来とは、有時の往来だ。みんな童象になれ、度量を大にして尽天地を我が蒲団とする境界を造れ、これがこの段的的意である。

【中山】 有時とは時間的即空間的、空間的即時間的：その根源は現在ということ：今と此所との相即である。今は：無限の過去、無限の未来を包んでおり、同時に無限の過去無限の未来に舒している。即ち三世を貫いている今である。此所も・・・十方世界を貫いている絶対の此所である。過去も未来も、現在に宿縁的にやじる。有時時は不離一体、多が一、同時に一が多。時と有は異なつたもの：一体として有時。時と有とは異なつた意味をもつたもの：相碍するもの、相碍を媒介としての無相碍ということ。こういう関わり合

い、即ち矛盾的相即を往来といった…この理(往来)を修得するのが修行である。禪師は「行持現成するをい  
まという」<sup>五</sup>ともいわれている。

【田中】「往来」とは自己が万物の尽地となり、自己が自然の自覚点となることである。一方が存在的事  
態ならば、他方は自覚的事態である。一方が往ならば他方は来である。

【高橋】この往来も一多相即をそのように表現したものと見なければならず、…。

▼しかあるを、佛法をならはざる『凡人は時間の経過を考える』

### 【原文】

しかあるを、佛法をならはざる凡夫の時節にあらゆる見解は、有時のことばをきくにおもはく、あるときは  
三頭八臂さんずはつびとなれりき、あるときは丈六八尺じょうろくはつしやくとなれりき。たとゑば河をすぎ山をすぎしがごとくなりと。  
いまはその山河、たとひあるらめども、われすぎきたりて、いま玉殿朱楼ぎよくてんしゆろうに処せり、山河とわれと、天と  
地となりとおもふ。

### 【試訳】

そうであるのに、仏法を信じていない凡人は、存在と時間という言葉から、ある時は妖怪がそこにいた、またある時は仏があそこにいたなどと思ってしまう。例えば、遠い道のりを歩いて、途中で河を渡り、山を越えて来たとしよう、今でもその山河は当然あるだろうが、その山河を通り過ぎて今は玉飾りのついた宮殿で朱色の楼閣に佇たまたんでいる、そこで思うことは今でも当然あそこに山河があつてここに私がいる、天があつて大地があるということである。

#### 【参考資料】

【啓迪】「一切はみな時の現成じゃ、無上独尊じゃ」いうて、今日迷中の修行の一時に全時そなが具そなわることを見わし、片時も忽卒そつそつにしてはならぬことを明かすが、この一段の大意である。

【中山】それは時間を直線的にのみ考え、对象的にのみ考える凡夫の情量に過ぎない。

▼しかあれども、道理この一條 『時は経過しない、現在があるのみ』

#### 【原文】

しかあれども、道理この一條のみにあらず。いはゆる山をのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし。われすでにあり、時さるべからず。時もし去来こらいの相そうにあらずば、上山うみやまの時ときは有時うじの而今にこんなり。時ときもも去来きょらいの相そうをほうにん保ほう任にんせば、われに有時うじの而今にこんある、これ有時うじなり。かの上山渡河うみやまがわの時とき、この玉殿朱楼たまどのしゆろうの時ときを

吞却せざらんや、吐却せざらんや。

【試訳】

しかし時についての道理はこの考え方だけではない、いわゆる山を上り、河を渡った時に私がいたのであり、私の行為が時そのものなのである。私があるに確実にいたのであり、時は過ぎ去っていくものではない。もし時に過去及び未来の様相がないとすれば、上山した時は有時が現成しているまさにこの今である、時がもし過去及び未来の様相を有しているのであれば、私自身が現在そのものを保持していることになる。これが有時の意味である。かの山を上り、河を渡った「その時」はこの宮殿の朱塗りの楼閣にいる「この時」を呑み尽くして一つの時になっているのであろうか、或るいは吐き出してそれぞれ別の時を産み出しているのであろうか。

《注釈》

この段は極めて分かり辛いがこの有時の巻のエッセンスでもある。道元禪師にとつての時は現在のみである。山を上り、河を渡り、今、宮殿に到着している自分がある。その自分にとって、山や河はどのようなものであろうか。過去の一時点において山に上った、又その後の一時点に於いて河を渡った、そして現在の私がある、という考え方は採らない。それでは山河の私は何処にいるのか、それはその時にいるのである。その時にいたのではない。私はその時に山を上っているという現在でしかない。山を上るのも、河を渡るの

も、今ここにいる私なのである。その意味で道元禪師は過去および未来を否定する、しかしその事実自体を否定するのではなく、過去にその事実が起こって、今はない、という事態を否定する。過去の事実と思われるものは過去の事象ではなく、現在を構成する一事実なのである。彼には現在しかない。過去はない、あるいは過去は現在の一事象なのである。そこで、もし過去未来の相を考えなければ、常に現在しかないのであるから、山に上る時は現在である。一方もし過去未来の相があるとするなら、その事象は私が考え出した相でしかないのであるから、それは私にとっての事実であり私の現在ということになる。

#### 【参考資料】

【啓迪】 ここはその凡見を破して「時」の無去来を示される。一時が尽時で尽法界だから、出現の時、どの一時にも尽時が籠る。この而今の一時をはずれて、一時としても、去るものもなければ来るものもない。

【中山】 時は過ぎながら、同時に現在の中に生れている。時は過ぎていない。現在は流れの一点でありながら、その流れの全体を包んでいる。時は非断・非常、即ち非連続の連続といわれる所以である。我のあるところがいつも現在なのである。現在とは現にもののあるところである。それ故に有時という。

【正法眼蔵新講 伊福部隆彦】 上山渡河の玉殿朱樓と去来の相があるように見えても、われが有時の今であることから推して考えて、その去来は、実は無去来の有時であるという意味。上山の時は玉殿を呑んで上山はない、玉殿の時には上山を吐き出して上山はない。

【開解】 上る時は即今のいまの時、一切時ついてまわるから去来の相なし、「時もし」は上の意を打反し



て云、時もし去來の相を保任し、持て居らぬゆへに今日われ當人にある時これ心の有時なり。悟ったとて心の時が外から來たのでもなし、迷ったとて脇へ去るものでもない、ただ吞と吐と時異なる計りじや。

【御抄】時もし去來とゆるさば、去も有時、來も有時なるべしと云ふ心地なり。

【正法眼藏辨註】並調絃 天桂伝尊 刹那も時なり、久遠も時、時已に無時、無時即常住なり。彼時に今此の時を吞却せりとも云うべきか、・・・昔日の山に上る時より吐却せりとも云うべきか、是前に云ふ十二時の去來ノ方跡と、復次に如是の往來は修行の發足なりと、ありし時の往來去來なり。

【高橋】有時とは存在と時間とを融即した主体的な自己に中心を置いての概念、而今は場合によつて「過去を断除して未來を決定する」主体的「行」（實踐）の立場から考えられている概念。

▼三頭八臂はきのふの時なり 『昨日今日は今において同時、時は飛び去らない』

【原文】

三頭八臂はきのふの時なり、 丈六八尺はけふの時なり。 しかあれども、その昨今の道理、ただこれ山のなかに直入して、千峯萬峯をみわたす時節なり、すぎぬるにあらず。三頭八臂もすなはちわが有時にて一經す、彼方にあるにたれども而今なり。丈六八尺もすなはちわが有時にて一經す、彼処にあるにたれども而今なり。しかあれば、松も時なり、竹も時なり。時は飛去するとのみ解会すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。時もし飛去に一任せば、間隙ありぬべし。有時の道を経聞せざるは、すぎぬ

るとのみ学するによりてなり。

【試訳】

昨日、頭三つ手八本の妖怪がいた、今日は立ち姿の、あるいは坐する仏がいる、しかしその昨日今日という時間概念はただ山に分け入って連なる峰々を一度にかつ同時に見渡す時の光景のようなものである。過ぎ去っていく光景はない、昨日現われた妖怪も私の時の現われとして同時なのである、昨日という遠い向うに過ぎ去ってしまったことのようなのであるがこの今なのである。今日礼拝した仏像も私の時の現われとして同時なのである、今まさに過ぎてしまったばかりのようであるが、この今において同時なのである、だから峰々に繁る松も同時であり、竹も同時である。時は飛び去るとのみ理解してはいけない、時が飛び去ることは時のハタラクだからだとばかり考えてはならない。飛び去ることが時であるとすれば、そこに隙間が生ずるはずである、時のハタラクを本当に理解しないのは時というものがただ過ぎ去っていくとばかり学んでしまっただからである。

【参考資料】

【啓迪】ただ時は無去来。むこらい 百千万の生滅去来が<sup>ひやくせんまん</sup>あつても時は一時である。しちうめつこらい こつちの行くに従つて時は自在に現ずる。去来があるというのは、前の時が去つて後の時が来るということだから、それならばその間に隙間ができる。しかるに時は現に見る通りで隙間がない。無去来の証拠だ。

【中山】吞却どんきやくは求心的きゅうしんてき、吐却とちやくは遠心的えんしんてき、吞却どんきやくは摂する、吐却とちやくは舒じべる。舒撰じせつ同時。かの上山、渡河の時にすでに今の玉殿朱樓の時を撰し含んでいたのであり、すでに舒じべて(吐)いたのである。現在の中に過未を撰し、現在から過未へ舒じべている。過去は過ぎ去りながらしかも現在の中に宿すくっており、未来は未だ来たらざるものでありながら、しかもすでに現在の中に、含まれている。

【御抄】時の飛去ひこと云いうは打任うちまかせて我々が思い付きたる、午時うまより未ひつじにうつり、乃至申なほしるより酉とりにうつる、これを解會げえすべからずとは被制せいひのなり也、如此一任いちじようせば、一定いちじようまことに間隔けんかくはありぬべし、午うより未ひつじにうつり、申しんより酉うにうつる、あひだは間隔かんかくあるべし、

【聞解】時が飛去ひこに一任いちまかせせば隙間ひまがあるはず、前まへきへ去いりて、後あとから来るといへば、其間そのまに間断かんたんすきまがある。

【那一寶】昨今の道理ちり只この山の中に直入ちくじやくして、千峯萬峯を見わたす時節ときせふの如ごとくにして、同時に同見どうけんするなり、故ゆゑに到り来るの時ときなく、過去かこの跡あとなし。

【田中晃】飛とび去いった時ときと飛とび来きたる時ときとの間に間隙かんかくの生なじることもある。

【高橋】間隙かんかくありぬべし、とは主体的な自己と密接みせつしてすきまがないはずだとの意味いみにおいて理解りかいされるべきもの。

▼要をとりていはば 『過去現在未来を今の世界として把握すること、それが経歴』

【原文】

要をとりていはば、尽界にあらゆる尽有は、つらなりながら時々なり。有時なるによりて吾有時なり。有時に経歴の功德あり、いはゆる今日より明日へ経歴す、今日より昨日に経歴す、昨日より今日へ経歴す。今日より今日に経歴す、明日より明日に経歴す。経歴はそれ時の功德なるがゆへに。

古今の時、かさなれるにあらず、ならびつもれるにあざれども、青原も時なり、黄檗も時なり、江西も石頭も時なり。自他すでに時なるがゆへに、修証は諸時なり。入泥入水おなじく時なり。いまの凡夫の見、および見の因縁、これ凡夫のみるところなりといへども、凡夫の法にあらず、法しばらく凡夫を因縁せるのみなり。この時、この有は、法にあらずと学するがゆへに、丈六金身はわれにあらずと認するなり。われを丈六金身にあらずとのがれんとする、またすなはち有時の片々なり、未証掘者の看々なり。

【訳訳】

要するに、この世界は連続する時なのである。有る時とは私の存在であり時間なのである。存在と時間に経歴(時間空間の転位・展開)というハタラクがある。今日より明日へ経歴する、今日より昨日に経歴する、昨日より今日へ経歴する、今日より今日に経歴する、明日より明日に経歴する。経歴とは時のハタラクだから。

過去の時と現在の時とは重なっているのではない、並び連なるものでもないが、青原行思(七四〇)がい

た時があり、黄檗(希運)がいた時があり、江西(馬祖道一)が、石頭(希遷)が、  
七九〇)がいた時がある。自分も他人もすでに時であるから、修証の一つひとつが時である。泥にまみれ  
水につかり衆生(済度)するも時である。今の凡夫の見方、その見方の困つて来たる(処)は凡夫の見解(見解)である  
とはいっても、凡夫の真実のあり方ではない、真実が凡夫を抛り所としているだけなのである。この時間、  
存在は真実ではないと学ぶが故に、仏を我とは違う次元のものだと認識してしまう。自分は仏とは違うもの  
だと言つて卑下するのもまた存在と時間の一つ、悟らざるもの(見解)の一つなのである。「悟らざるものは  
よくよく見なさい」ということである。

### 《注釈》

過去の祖師も一人ひとりがある時であり世界である。時に裏打ちされた世界が有時、時は世界を結びつ  
ける糊である。世界を動かす時、動く世界が有時であり、世界を働かせる時が有時である。世界が運動する  
ことにおいて世界が世界として認識される、その運動の基礎は時間である。昨日の世界に於いてその時体験  
した世界は今現在の記憶にある昨日の世界と同一であると理解することが経歴、それは明日の世界に於いて  
も同じである。

### 【参考資料】

【御抄】修証共に諸時なる、道理(けんぜん)顯然なるべし、打ち(うち)任せ(まか)せては三身(さんしん)を談(だん)ずるにも、應身(おうしん)は衆生化度の應

用をあらはす、法身こそ眞實なれなむと常には談これをたんずるか之歟、是は法報應共に時なるべし、さらに法報應等に、とゞこをるべからざるなり。

【聞解】仏道で有時の経歴と云うは、刹那々に變滅へんめつりん離盡して無間斷に經る。功德ここではあたりまへ、持ち前と云程のこと、刹那々に経歴する、有時の功德によりて、古今に重なりさへぬもと絶對なるゆへに。

【啓迪】有時の経歴というのは、刹那刹那に生滅まじん起尽して無間斷に経歴することだ。だから全機現ぜんきげんの生滅である。・・・と三時があるけれども、刹那経歴だから重なるにあらず、という。

【田中晃】有時という意味の勝義しょうぎの顕現けんげんが経歴であると云えよう。吾々はこの瞬間の連続へ一定の中を与えて今日という意味を持たせるのである。時の自己限定が何故に今日であるかと云えば、それは明日を、また昨日を予想するからである。今日の而今あつて明日が成り立つから、これを「今日より明日へ経歴す」という。道元の経歴の概念には流れる時の觀念を有時の論から根本的に解釈し直そうとする意図があると思われる。

【高橋】経歴はどこまでも「時」の断絶性に基づいて理解されるべきものである。主体的自己の上に連續性を反映する概念となっている。

【中山】つらなりながら、しかもその時、その時、独立無伴である。現在は過去と未来を含んだものである。現在において過去と未来が結びついていると同時に過去と未来を分離している。時間的即空間的に、有即時、時即有的に即ち有と時の矛盾的即相即的なる有時の現成に他ならない。いつもが現在にして、そこに無限の過去、未来を包んでいる。

【道元禪師全集 第一卷 河村孝道】有時は時々刻々に而今(いま)として絶対現成するはたらき(功德)がある。

▼いま世界に排列せるむま 『有時を究めることは自己の真理を悟ること』

【原文】

いま世界に排列せるむま・ひつじをあらしむるも、住法位じゅうぼうゐいの恣いん麼もなる昇降しやうかう上下じやうじやうなり。ねずみも時なり、  
とらも時なり、生も時なり、仏も時なり。この時、三頭八臂さんずはつひにて尽界じんかいを証しやうし、丈六金身じやうろくこんしんにて尽界じんかいを証しやうす。  
それ尽界じんかいをもて尽界じんかいを界尽かいじんするを、究尽くうじんするとはいふなり。丈六金身じやうろくこんしんをもて丈六金身じやうろくこんしんするを、発心ほつしん・修行しゆぎやう・  
菩提ぼだい・涅槃ねはんと現成げんじやうする、すなはち有うなり、時じなり。尽時じんじを尽有じんじゆうと究尽くうじんするのみ、さらに剩法じやうぼうなし、剩法じやうぼう  
これ剩法じやうぼうなるがゆへに。たとひ半究尽はんくうじんの有時うじも、半有時はんうじの究尽くうじんなり。たとひ蹉過しやかすとみゆる形段ぎやうだんも有うなり。  
さらにかれにまかすれば、蹉過しやかの現成げんじやうする前後ぜんごながら、有時うじの住位じゆうゐなり。住法位じゆうぼうゐの活鱗鱒地かつぼんぼちなる、これ有時うじ  
なり。無むと動著どうじやすべからず、有うと強為きやうゐすべからず。時ときは一向いっじやうにすぐるとのみ計功けいこうして、未到むたうと解会げえせず。解

六 住法位…知法常無性、佛種從緣起、是故說一乘、是法住法位、世間相常住(法華經、方便品)法の住、法の位…縁起の法は自体が空であるから、縁によつて起るということは、法の本来的な在り方であるという意味である。常住…生滅変化してやまない世間の相も、縁起である限りその生滅変化の相そのまま法の住、法の位、即ち常住であるという意味。法華經、上、岩波文庫 訳注三四二頁

会は時なりといへども、他にひかるゝ縁なし。去来と認じて、住位の有時と見徹せる皮袋なし。いはんや透闕の時あらんや。たとひ住位を認ずとも、たれか既得恁麼の保任を道得せん。たとひ恁麼と道得せることひさしきを、いまだ面目現前を模索せざるなし。凡夫の有時なるに一任すれば、菩提・涅槃もわづかに去来の相のみなる有時なり。

### 【試訳】

今世界に押し開かれて刻まれている正午や午後二時という時刻は、真実世界のそのような有り方としての時の流れの向きであり、方角である。零時も時、四時も時、衆生も時、諸仏も時である。このような時は頭三つ、手八本の妖怪が世界を實現し、諸仏が世界の在り方を明らかにする。世界を以て世界を現わすことを世界を究めるといっているのである。諸仏が諸仏であろうとすることを、発心・修行・菩提・涅槃にて實現(現成)する、即ち存在であり時間である(有であり時である)。時を究め有を究めて、究め尽くすのである。究め尽くしているからそこには余りがない、余りとは余りであるが故に。例え、存在と時間を半分だけしか究めなくても、それは半分を究め尽くしたのである。たとえ誤りが形になって現れていてもその現われとしての存在である。さらに有時の真理に身を委ねれば、誤りが現われる前も後も、有時の真理の實現であり、真理の活き活きとしたハタラキなのである。これが有時である。そのようなハタラキなど無いなどと考えてはいけない、また常に有るものだと強調してもいけない。時間はただ過ぎていくものだと考えて、未だ到らないという事態を理解しない、そのような理解という行為も時のハタラキではあるが、どのように理解してもそ



れは自分自身によるものであり真理が歪められることはない。時は流れ去るものだという先入観念を信じてしまつて眞実世界の有時を理解しようとする輩はいない。まして解脱世界の時などあり得ようか。たといマコトの世界を認めたとしても初めから具わっているかくある自身の無上菩提悟りを誰が理解していようか。たとい以前からかくあるものであると言ひ得てきたとしても、未だに目の前に見えるものを探さない人はいない。凡人の考える有時時空においては、眞実の世界も時とともにただ流れ去るものとしか見えないだらう。

### 《注釈》

有時の法を理解できている人は少ないが、有時の眞理を究め尽くすことによつて世界が理解できる。それは我々に初めから具わっている悟りの世界であるにも拘らず、上つ面の時間の流れしか追わないために眞理を見ることができない、と云うのが道元禪師の有時の基本である。従つて有時を理解することは眞理に近づぐことであり、又本来各自に備わっている悟りを自覚することでもあるのである。

### 【参考資料】

【啓迪】法界はみな有時有時の現成で、その時その時が独立無伴じゃと云うにある。昇降とは子丑寅ねうしとらと昇のぼりり、また元もとの子こにね戻るゆえ昇降と云う。未到とは住法位―それぞれ本位に在ることだ。また先行不到、末後太おほ大過の意である。春も秋も一向に不到なることを氣付かぬ。透とお関かんとは解脱と云うことだ。

【御抄】かいじん 界盡と打かへせば、能所被此なき道理があらわるる也、

【聞解】午も時なり、未も時なり、かうあらしむるが、法住法位、いんもによせ 恁麼如是なる時じや、昇降はのぼり下りのこと、上下と同意、一日で勘定すれば、卯辰巳午は上る、未申酉は下るなり、一日一夜に如是あるなる、これらの時が、みな心所現の有時なり、

【私記】すぐるとのみ計功して未到と解會せずとは、不到太過のともに中であらざるがごとし。

【日本思想体系 道元上 頭注 寺田透】住法位の恁麼なる・・・住存在の根本理法として、正位に就くというそのことである、そのような形の上下運動。存在の根本理法の正位は運動(経歴)なのだ。うま、ひつじ、等は方位方角の代用名詞。

▼おほよそ、籬籠とどまらず 『経歴は世界の今を生きること』

おほよそ、籬籠とどまらず有時現成なり。いま右界に現成し、左方に現成する天王天衆、いまもわが尽力する有時なり。その余外にある水陸の衆有時、これわがいま尽力して現成するなり。冥陽に有時なる諸類諸頭、みなわが尽力現成なり、尽力経歴なり。わがいま尽力経歴にあらざれば、一法一物も現成することなし、経歴することなしと参学すべし。

経歴といふは、風雨の東西するがごとく学しきたるべからず。尽界は不動転なるにあらず、不進退なる

にあらざ、経歴なり。経歴は、たとへば春のごとし、春に許多般の様子あり、これを経歴といふ。外物なきに経歴すると参学すべし。たとへば、春の経歴はかならず春を経歴するなり。経歴は春にあらざれども、春の経歴なるがゆゑに、経歴いま春の時に成道せり。審細に参来参去すべし。経歴をいふに、境は外頭に於て、能経歴の法は、東にむきて百千世界をゆきすぎて、百千万劫をふるとおもふは、仏道の参学、これのみを專一にせざるなり。

### 【試訳】

およそ眞実世界の有時(存在と時間)は限定しきれるものではない。今自己の内にある天上世界も眞実の有時である。そのほかにある水中、陸上に暮らす生物の有時も自己のハタラクである。昼夜に時を過してゐる諸々雑多の存在も自己のハタラクの現われである。ハタラクの経歴(実践)である。自己のハタラクの経歴(体験)でないものはどんなものも現成することはない、経歴(実証)されないと理解すべきである。

経歴というのは風雨が東から西に移るようなものだと学んではならない。世界は動かないわけではない、進退しないわけでもない。時に生きているのである。経歴(時を實踐する)とは例えば春のようなものである。春にはたくさんの様相がある、それを経歴(時を体験する)という。他のものではなく、ただ経歴(時を實踐)すると学ぶべきである。例えば、春の経歴(実践)は必ず、春と共に生きているのである。経歴(体験)は春ではない、しかし時は春を現わしているが故に、春と云う時が実現しているのである。よくよく時の流れと云うものを熟慮すべきである。時に生きるということについて、対象を外においてその対象に向かつて空間的に行

き過ぎ、時間が経過していくと思うのは仏道の参学としてないことはないが、それだけではないからなのである。

### 《注釈》

有時(存在と時間)が世界を現成せしめることが経歴であって、経歴は運動する世界の様相である。経歴は実践であり、体験でありまた実証である。時と共に生きることである。春を生きているのであり、今を生きているのである。道元禪師の仏道はそれを身体で学ぶことなのである。経歴とは過現未が一刹那において現成している状態であろう。

### 〔参考資料〕

【啓迪】法界の有時なる道理。「わが尽力する有時なり」は「有時の尽力する現成なり」ということ。有時の住法位を経歴といわれる。一時一時の究尽で、一時一時の経歴と云うことになる。経歴に被此ひしの隔たりを見るは仏道の参学ではない。

【御抄】如此ここよりかしこへ生ずるあいだ、百千世界を行き過ぎて、百千萬劫と思ふ事を仏道の参学專一にせざるとは、被嫌なり、実に此義今祖門所談の心地には天地縣隔てんちけんきやくなるべし。

【聞解】仏道の有時と云うは、外道の無と動著どうじやする断見だんけん、凡夫ぼんぷの強為かういする妄有もうう、これ等 籬籠しりやうを超越して、とどまらぬ、此れが有時現成なり。

【辨註】能経歴の行脚的の法は、例えば東方に向けて百千世界を歩き過ぎて、百千萬劫を遍歴すると思ふはなきにはあらず、佛の三祇劫修行を説き玉ふ是なり、されども仏道の參学これのみを遍歴參学の專一にせざるなり。

【私記】経歴に被此往來をみるは、仏道の參学專一にならざるがゆへのみ。

【那一寶】能経歴の法は例ば東方に向けて百千世界を行過て、百千萬劫を遍歴すると思ふは無きにあらず、佛三祇劫修行の事を説玉ふ是也といへども是皆權門の説なり、我が祖門下に在つては前に所謂盡界を以て盡界を盡界するを究盡とは云うなり。此れを以て見よ本處を動かす、十方周遍するは自己の盡十方界の経歴なることを。

【田中晃】大我の生成力の発現としての経歴。経歴は事々物々がそのあり方を尽して生成生滅する事態の推移であらう。

【正法眼蔵參究 有時 安谷白雲】仏道の參学は長年月を要するという一面だけを專一とすべきではない。三祇劫の修行もちゃんと認めた上で、一超直入をお示しになる。

【高橋】経歴本来の性格は動転進退の否定による住法位の断絶性にあるとの主旨成ることが知られる。

▼葉山弘道大師 『揚眉瞬目も山海も有時の現成である』

【原文】

葉山弘道大師、ちなみに無際大師の指示によりて江西大寂禪師に參問す、「三乘十二分教、某甲ほどそ

の宗旨をあきらむ。如何は祖師西来意《如何ならんか是れ祖師西来意》。

かくのごとくとふに大寂禪師いはく、

有時教伊揚眉瞬目うじきよういようびしゆんもく七

《ある時は伊をして眉を揚げ目を瞬がしむ》、

有時不教伊揚眉瞬目

《ある時は伊をして眉を揚げ目を瞬がしめず》。

有時教伊揚眉瞬目者是

《ある時は伊をして眉を揚げ目を瞬がしむる者は》、

有時教伊揚眉瞬目者不是

《ある時は伊をして眉を揚げ目を瞬がしむる者不是なり》。

葉山きよて大悟し、大寂にまうす、「某甲かつて石頭せきとうにありし、蚊子の鉄牛ぶんすにのぼれるがごとし」。

大寂の道取どうしゆするところ、余者とおなじからず。眉目びもくは山海なるべし、山海は眉目なるゆへに。その「教伊揚」は山をみるべし、その「教伊瞬」は海を宗すべし。「是」は「伊」に慣習かんじゆうせり、「伊」は「教」に誘引きゆういんせらる。「不是」は「不教伊」にあらず、「不教伊」は「不是」にあらず、これらともに有時なり。

山も時なり、海も時なり。時にあらざれば山海あるべからず、山海の而今にこんに時あらずとすべからず。時も壊えすれば山海も壊す、時もし不壊ふえなれば、山海も不壊なり。この道理に明星めいじやう出現す、如来出現す、眼睛がんげい出現す、拈花ねんげ出現す。これ時なり。時にあらざれば不恁麼ふいんもなり。

七 釈迦の拈花微笑を典故とする。「世尊靈山会上に在て、花を拈じて衆に示したまふ。衆皆默然たり。唯だ迦葉のみ破顔微笑せり。」聯燈会要一 この揚眉瞬目は御抄に「此詞は釈尊與迦葉、拈優曇華破顔微笑の時をさすなり」とあるように、釈尊から迦葉への師資相承と見る事ができる。

【試訳】

やくさんいげん

薬山惟儼大師(七四五〜八二八)はあるとき石頭希遷大師(七〇〇〜七九〇)の指示によつて馬祖道一禪師(七

〇九〜七八九)に参じて問うた：「私は仏教のあらゆる教えを習いましたが、祖師西来意の意味するところが分かりません。どのようなことでしょうか。」

このような問に対して、道一は云った。

ある時ある所で、彼(釈尊)をして眉を揚げ、瞬きをさせる。

ある時ある所で、彼をして眉を揚げさせず、瞬きをさせない。

ある時ある所で、彼をして眉を揚げ、瞬きさせるのは是(祖師西来)である。

ある時ある所で、彼をして眉を揚げ、瞬きさせるのは不是である。

薬山はこれを聞いて大悟し、道一に云った。「私がかつて石頭大師のもとにありましたが、全く意味が分からず、蚊が鉄の牛に登っていたようなものでした。」

道一禪師の云う所はほかの人と同じではない、眉目は山海であり、山海は眉目であるが故に。その釈尊をして揚げさせるのは眉とともに山であり、又釈尊をして瞬きさせるのは目とともに海である。是(達磨)による仏法伝来という肯定は彼(釈尊)の拈花微笑(ねんげなまう)に習うことであり、彼(釈尊)はその(相承する)ように働きかけられているのである。不是(祖師西来)にあらずという否定は彼(釈尊)に拈花微笑させないということではない、彼(釈尊)にさせないということはこれ(祖師西来)ではないという否定ではない。これらはもともと有

時という存在と時間の話なのである。

山も時、海も時。時がなければ山海はありえない。山海が目のまえに現われているこの今において時がないということはありません。時間の概念が壊れれば、山海も壊れる。時間がもし壊れなければ、山海も壊れない。釈尊が明けの明星において悟ったものはまさにこの道理であり、それゆえ釈迦が如来となつて現れたのであり、佛祖の眼が現われたのであり、釈迦と摩訶迦葉まかじようとの拈花微笑ねんげみじようが現われたのである。これが真実の時であり、自己の時と共になければそのようことにはならない。

### 《注釈》

釈迦の一挙手一投足が山海であり自然の現われであり、有時の現成である。ここでは直接的には示されていないが、時間を運動として考えると理解が容易になろう。典故てんこそれ自体は御抄などによつても釈迦の拈花微笑を述べたものと考えることができが、しかし不、是、不是などは難解である。典故の出発点が「祖師西来意」であることから、その以心伝心が達磨をして山海をこえて中国に仏法をもたらしたということが前提となる。後段において道元禪師の解釈はさらに難解であるが、公案に示される揚眉瞬目ようびしゆんもくが運動であり、それは有時を現成させているものと考え、先の拈花微笑、祖師西来意を合わせて考えると、「教伊揚は山をみるべし・・・」は眉目の動きが山海の実現であり、自然(有時)の現成であると解釈でき、又「是」とは仏祖伝来の事実であつて、「伊」は釈尊を現わしていると考えられる。従つて「是」は「伊」に慣習せり・・・以下をかなり大胆に意識すれば、『達磨による印度から中国への仏法伝来という事実は釈尊から摩訶迦葉まかじようへ



の拈花微笑に習うことであり、釈尊は迦葉への師資相承しそくじようを働きかけられているのである。しかしながら祖師西来にあらずという否定が釈尊に師資相承しそくじよう拈花微笑させないということではない、また釈尊から迦葉に師資相承させないということが祖師西来をもたらさないということでもない。拈花微笑も祖師西来ももともと有時という存在と時間を示した話なのである。』

時間が自然を形成していて、運動がなければ全てが消滅するのである。すなわち運動のない世界とは静止した絵画であり虚の世界でしかないのである。時が壊れることがないように、山海も壊れない、釈尊が明けの明星において悟ったものはまさにこの道理であり、それ故に釈尊は如来となり、仏法が成立し、拈花微笑によって師資相承、祖師西来を経て今日の仏法があるのである。

#### 【参考資料】

【御抄】このことは此詞は釈尊しゃくそん與迦葉かしょう拈優曇華破顔微笑の時をさすなり。今は盡十方界じんじつぱうかいが釈尊しゃくそんの體かた、盡十方界が迦葉と談ずるゆへに、今の眉目は山海なるべし、山海は眉目なるべしとは、云也、たとえて云はば、盡界眉也、盡界目也とも云うべし、已盡十方界沙門すでじじんじつぱうかいざもん一隻眼とも云ゆへに。

【聞解】伊とは同皮同肉なり。伊は教に・・・教字は、使字令字の意で、せしむると訓ず。

【那一寶】是ぜ不是ふぜ能所のうしよを脱落して、是と云ひ不是と云ふ、共に是有時なることを知るべし。

【啓迪】この「道理」とは、有時と山河と親切なること、そこに「明星出現」がある。

【田中晃】慣習せりという、すなわちなじんであるのである。彼は教に誘引せらるという。ただし教と

いうも何事かを教えるというのではなく、大自然の道理に誘引されて、自己がその道理によってあることを自覚するのである。

【高橋】慣習とは慣れ合いで同一体になっているの意。釈迦が揚眉瞬目で教化したように、達磨をして東來教化せしむの意で読む。

【中山】時と山海(有)は不離一体である。むろん矛盾相即的に一体である。これを有時という。

▼葉県の帰省禪師は 『真理の現成と行為の中に有時をみる』

【原文】

葉県の帰省禪師は臨済の法孫なり、首山の嫡嗣なり。あるとき大衆にしめしていはく、

有時意到句不到、

有時句到意不到。

有時意句兩俱到、

有時意句俱不到。

《ある時は意到りて句到らず、  
ある時は句到りて意到らず。

ある時は意句兩つ俱に到る、  
ある時は意句俱に到らず。》

「意」「句」ともに有時なり、「到」「不到」ともに有時なり。到時未了なりといへども不到時来なり。意は驢なり、句は馬なり。馬を句とし、驢を意とせり。「到」それ来にあらず、「不到」これ未にあらず、有時かくのごとくなり。到は到に聖礙せられて、不到に聖礙せられず。不到は不到に聖礙せられて、到に聖礙せら

れず。意は意をさへ、意をみる。句は句をさへ、句をみる。礙は礙をさへ、礙をみる。礙は礙を礙するなり、これ時なり。礙は他法に使得せらるといへども、他法を礙する礙はまだあらざるなり。我逢人なり、人逢人なり、我逢我なり、出逢出なり。これらもし時をえざるには、恁麼ならざるなり。

又、意は現成公案の時なり、句は向上関板の時なり。到は脱体の時なり、不到は即此離此の時なり。かくのごとく辨肯すべし、有時すべし。

葉原の帰省禪師は臨濟義玄(八六七)の法孫である。首山省念(九二六～九九三)の嫡嗣である。あるとき大衆に説いた、

「ある時ある所で、思いが届くも言葉が届かない、

ある時ある所で、言葉が届くも思いが届かない、

ある時ある所で、思いが届いてしかも言葉が届く、

ある時ある所で、思いも届かず言葉も届かない。」

「思い」「言葉」共に有時であり、「届く」「届かない」も共に有時である。「届く時」は未だ到来していても「届かない時」は到来している。「思い」とは驢馬ろばであり「言葉」は馬である、従つて馬が言葉であり驢馬が思いである。驢馬の一件が片付く前に馬の事件が起つたという故事がある、すなわち思いと言葉が同時に届いているということである。「届く」とは既に着いているということではない。「届かない」とは未だ着いていない、ということではない、有時とはこのようなものである。「届く」は届くに礙あたげられて、

届かないに礙げられない。「届かない」は届かないに礙げられて、届くに礙げられない。「思い」は思いに礙げられ、思いを見る、「言葉」は言葉を礙げ、言葉を見る。「礙げ」は礙げを礙げ、礙げを見る。「礙げ」は礙げを礙げる、これが時である。「礙げ」は他の真理に使われるといつても、他の真理を礙げる礙げは未だに現れてはいない。私が人に逢う、人が人に逢う、私が私に逢う、出が出に逢う。もしこれらが時と共はないとしたら、そんなものにはならないであろう。また「思い」は現成公案（真実実現）の状態にある時である、「言葉」は成道する行為の時である。「届く」は身心脱落の状態にある時である、「届かない」は離れつつ一体になる行為の時である、このように理解すべきである、真実の存在と時間を味わうのである。

### 《注釈》

帰省禪師の偈の意味は思いとそれの表現としての言葉を取り上げ、思いが届くとしても言葉が届かない時、また言葉が届くが思いが届かない時があり、また両方届く時があり、又両方届かない時があるという四句分別という単単俱非の論理展開であるが、その偈を基にして道元禪師は、主観客観という二元対立を排除する能所一体の道理において、意、句、到及び不到がそれぞれ独立絶対の事象であるとするのである。これ等四つの事象を揚げた趣旨は何であろうか。さらに、意が現成公案、句が向上関楯、到が脱体、そして不到が即此離此とは何を意味するのであろうか。

八 鎮州三聖院慧然禪師道、我逢人即出、出即不為人。興化道、我逢人即不出、出即便為人（真字上九二）

それぞれの意味としては理解可能であるにしても、この段落が何を云わんとしているのか、真意がどこにあるのかは極めて分かりにくい。以下は全くの私見になる…

意が現成公案の時とは思いが真理現成している時である。例えば釈迦が摩訶迦葉に伝えようとした思いであろう。思いとは一つの状態である。時間を超越した一つのあり方である。句の向上関楨は『仏向上事といふは、仏にいたりて、すすみてさらに仏をみる<sup>九</sup>』ということであろう、すなわち修行に修行を重ねてそこに悟りをみるのである。これは行為である。時間の経過によって存在を存在ならしめる行為である。すなわち意は句によって初めてその存在を与えられるのであり、一方句は意によって同様に行為として成立するわけであるが、しかし道元禪師の述べるところはそれぞれが絶対であると云うことである。意句同事というあり方であろうか。到は脱体の時とは脱体現成、身心脱落する時であり、到達であり究極である。これは得られるべき状態を現わしている。一方、不到が即此離此とは付かず離れずで、迷いの世界にもどる菩薩のような、修行に修行を重ねる仏向上人であろうか。中途半端な存在であるが故に求め続ける人間の行為の表現であろう。到によって得られるべきあり方としての状態に対してそこを目指し続ける行為という不到を対置させることができるであろう。このようにみると意という状態に対比させる形で句という表現行為を対置し、求めるべき状態も絶対、求める行為も絶対という意味において有時を示そうし、また到という至るべき脱落状態、そしてそれに至ることのできない不到という行為の対置が常に修行の中に於いてのみ現わすことので

きる行為としての悟りを現わしている。従って到と不到はいずれも悟りの現成であり、修行の現成である。ここでの道元禅師の拈埵の意図は全ての現われが有時でないものではなく、時間と存在が有時でありそこに真理が現成していると云うことであるが、意句は真理という状態に対して表現という行為を対立させ、そのなかに有時を見ようとしている。一方到不到は身心脱落が悟りの現成という状態であり、その脱落に至らんがための付かず離れずの仏向上人が修行に修行を重ねている行為を対立させているのではないか。しかし意句を対置させることができたのは到不到の対置があつての故であり、意句到不到のそれぞれの対置を拈埵することにおいてそれぞれの絶対を云うことになる。ここで云おうとしているのは以心伝心に於いては心という状態も有時の現成、伝という行為も有時の現成であるということであろう。祖師西来意にあつては意という状態も有時の現成、西来という行為も現成である。釈迦の意も達磨の意もそれを伝えると云う行為と共にあることが有時することなのである。全ての事象は状態と行為の対立にあり、しかしその対立は弁証法的な対立ではなく、状態自体が行為であるような、また行為自体が状態であるような同事なのである。この段の最後にある「有時すべし」とはこのような対立を時の経過において同事として自分のものとせよ、ということではないか。すなわち無時間に見える永遠の真理という状態も修行という一つひとつの行為の中に現成するのであり、粥展鉢<sup>一〇</sup>における匙で粥をすくって食べるその一つの行為の中に真理を見いだすのであろう。坐禅はまさにその時間を感じる手段である。坐禅がまさに有時することなのである。

【参考資料】

【啓迪】意という時は意で尽きる、句と云う時は句で尽きる、みな尽天尽時で能所がない、それを一到は到に礙まじへらる、という。他法を礙まじえぬとは、これは向このままになりきる、能所一枚の道理である。

【中山】世界は有と時との矛盾的相即であり、去来こらいと無去来むこらいとの矛盾的相即である。仏教本来の立場に於いては、それ自身の中に矛盾を含んでいなければならない。

【御抄】意も句も、到も不到も時なりと云う也、故に意句共に有時也、到不到共に有時也と云うなり。

到と時と全く別物ならざる道理が、到時未了不到時来とは云わるるなり。有時すべしとあれば、有時独立の姿があらわるるなり。

【御聴書】佛道には能所なし、相對なし、只一法を以て萬法とも仕へば、罽礙つがの詞もおなじ物を罽礙つがと仕也、我逢人と云詞は、能所あるに似たり、しかあれども人の人にあひ、我逢我と云ふ、顯然けんぜんに無能所聞なり。

【闡解】意到、これは趙州じょうしゅうの到喫茶去とうちまつか、不到喫茶去の意なり。到の這邊しやへんも、不到の那邊なへんも、有時、此前後の歩みのごとし、這邊那邊一枚はなれぬ。有時すべしとは合點すべしという程のこと。

【辨註】驢事未去馬事到来ろじみこばじとうらい、迷を去らず悟り来たるの義なり。

【那一寶】意は祖師西来意の時なり、句は超佛越祖の時なり、到は盡大地の時なり、不到は虚空世界の時なりともなほ無盡に道取すべし。

【田中晃】意は精神、句は表現である。到我罣礙されるといふのは到といふ事態が十分に顕現しないことをいう。故に到が顕現しえないのは到が到に妨げられているのであって、不到に妨げられているのではない。関板かんぱんは関門の鍵であるから、向上関板こうじょうかんぱんとは成道の要を意味する。有時すべし…一つの事態を見を以て現成する修行において、時もまた時であるのである。

【正法眼蔵の哲学私観 田邊元】肯定は常に否定を伴い、而して否定は否定を否定して否定即肯定の自覚に至る、これ時に於いて永遠を証し、相対に於いて絶対を信ずる信証一如の絶対媒介なる所以ゆえんを、殆ど此以上を望む能はざる如き明瞭さを以て道破する。

【白雲】絶対全一の世界が見えると、邪魔は邪魔が邪魔をするだけだ。仏法の第一義からいうと、他の法を妨げたり、他の法に妨げられたりするような、対立の礙は、いまだかつてあらざるなりだ。現成公案とは活きた仏法の丸出しということだ。向上関板とは真実の仏法の活作用ということだ。脱体とは脱体現成の略で、丸出し丸出しということだ。即此離此そくしりしとは不即不離と云ったようなことだ。

【高橋】道元の主旨としては、存在の各時性における独立自全の趣きを言おうとするものであって、発展弁証法を性格とする否定即肯定の論理とは性格を異にする。

▼向來の尊宿ともに 『道半ばでも道を誤っても有時』

【原文】

向來きやうらいの尊宿そんしゆくともに恁麼いんもいふとも、さらに道取どうしゆすべきところなからんや。いふべし、



意句半到也いくほんとうや有時、

意句半不到也いくほんふとうや有時。

かくのごとくかくの参究あるべきなり。

教伊揚眉瞬目也きょういようびしゆんもくやはんろうじ半有時、

教伊揚眉瞬目也きょういようびしゆんもくやはんろうじ錯有時、

不教伊揚眉瞬目也ふきょういようびしゆんもくやはんろうじ錯々有時。

恁麼のごとくぜんま参来参去さんらいさんこさんとうさんふとう、参到参不到する、有時の時なり。

### 【試訳】

今まで見て来た祖師方がその様に云っているとしても、さらに云うべきところがないであろうか、あるいはこのように云うべきではなからうか、

思いが、言葉が届くであろう有る時(存在と時間)、

思いが、言葉が届かないかもしれない有る時(存在と時間)、

このように参じて究めるべきである。

釈尊をして眉を揚げ、瞬まばたきさせるかもしれない有る時(存在と時間)、

釈尊をして眉を揚げ、瞬まばたきさせる誤れる有る時(存在と時間)、

釈尊をして眉を揚げさせず、瞬まばたきさせない誤りに誤りぬいた真実の有時(存在と時間)、

このように未来に参じ、過去に参じ、到に参じ不到に参ずる、これら全て有時の時なのである。

《注釈》

ここでは半と錯に注目してみよう。半は半分の意味ではない。また啓迪が云うような全でもないと考ええる。私見ではこの半は零か全（百）かの対立を避けて、それ以外の全てを網羅するような半ではないかと考えてみたい。すなわち両極を避けて一から九十九までの過程を示し限定できない全ての量的な指標を現わしていると解するのである。一方、錯は正に對する錯誤であり、それは例えば空華の卷にみられる空に見える華、あるいは画餅の卷にみられる絵に描いた餅、そこに眞実を見出す道元禪師において錯の中にこそ眞実を見ることができるといふ意味ではなかるうか。誤つた有る時に眞実があり、不教伊にして錯あやまりを錯るといふ三重否定の中に眞実を求める姿を見ることができるといふ。

一方、本版によれば最後の三行が以下のように四行になっている。

教伊揚眉瞬目也半有時、

教伊揚眉瞬目也錯有時、

不教伊揚眉瞬目也半有時。

不教伊揚眉瞬目也錯有時

この表現では幾分意味合いが違ってくるようであるが、半および錯の使い方としては基本的には同様に考えることができると考える。四句の偈になっており、A、B、非A、非Bの形になっている。ここでは半

も錯も絶対としてのあり方を強調しているように考えられる。本文は洞雲寺本によっているが、そこでは最後の錯々に重さがあると思える。一方後者の本山版では非A、非Bの半、錯が対称的に示され、それぞれに味わいのある真理が現成している。御聴書にも『いはむや錯々有時もただ有時なるなり』の記述があり、筆者は洞雲寺本を道元禅師の意向として採りたい。

【参考資料】

【啓迪】半到とは全到じや。錯とは全ということ。

【中山】錯あやまった有時、或は中途半端であるとしても、錯まった有時も有時であり、半有時も有時の現成である、と解することも出来よう。其の時、其の時間がいつも絶対現在でなければならぬ。

【御抄】あやまりをもつてあやまりにつく、唯佛ゆいぶつ與佛よふと云う程の詞なるべし。

【御聴書】錯も不錯もただ有時なるなり、いはむや錯々有時もただ有時なるなり、あやまりをもつて、あやまりにつく(將錯しやうさく就錯じゆさく)と云う事あり、錯は半、錯々は全也、但又全が半をいふにはあらず、全半一なり

【聞解】半と云うは十成を許さぬ、宗門の詞。錯と云い、半と云う詞は、向上不放の一著子なり、強あながちに悪いと云ふ言葉にはあらざるなり。將錯就錯と云詞あり、あやまりを以てあやまりにつくとは、唯佛與佛と云程の詞なるべし。

【田中晃】到と不到との両極を絶対化することに対して、半到、半不到を提出したことは、すでに両極

の過程化を示唆しているが、その時はこれを有時とした。いまやこの有時を半有時とするのである。それは  
有時的絶対化を過程化するものにほかならないであろう。・・・修行は必ずや過程的であり、相対的である。  
そこに錯誤が生じる。錯誤もまた有時なりとするのは観想への逃避であつて、錯誤はまさに錯有時なるが故  
に、これより脱却せねばならぬ。人間は常にこの脱却の過程にある、過程にあるが故に半有時である。

【白雲】有時の半出来だ、いや有時の間違いだと擲擻やっしている。・・・なんでも有時だ、有時だと片付け  
てしまふような、一種の固定觀念に墮おちる病氣をいさめ、・・・血の涙で警告してくださいさる・・・。

## 正法眼藏有時第二十

仁治元年庚子開冬にんじがねんこうしかいとう

日書于興聖宝林寺においでこうしょう

寛元癸卯夏安居書写かんげんすのとうげあんご  
懷持えじま

著者 金子勝俊 東京都狛江市在住 東京都世田谷区耕雲寺坐禅会会員